

ウータン

《HUTAN》森の通信

No.12 1990.2.4

ウータン・森と生活を考える会

郵便振替 大阪3-3880

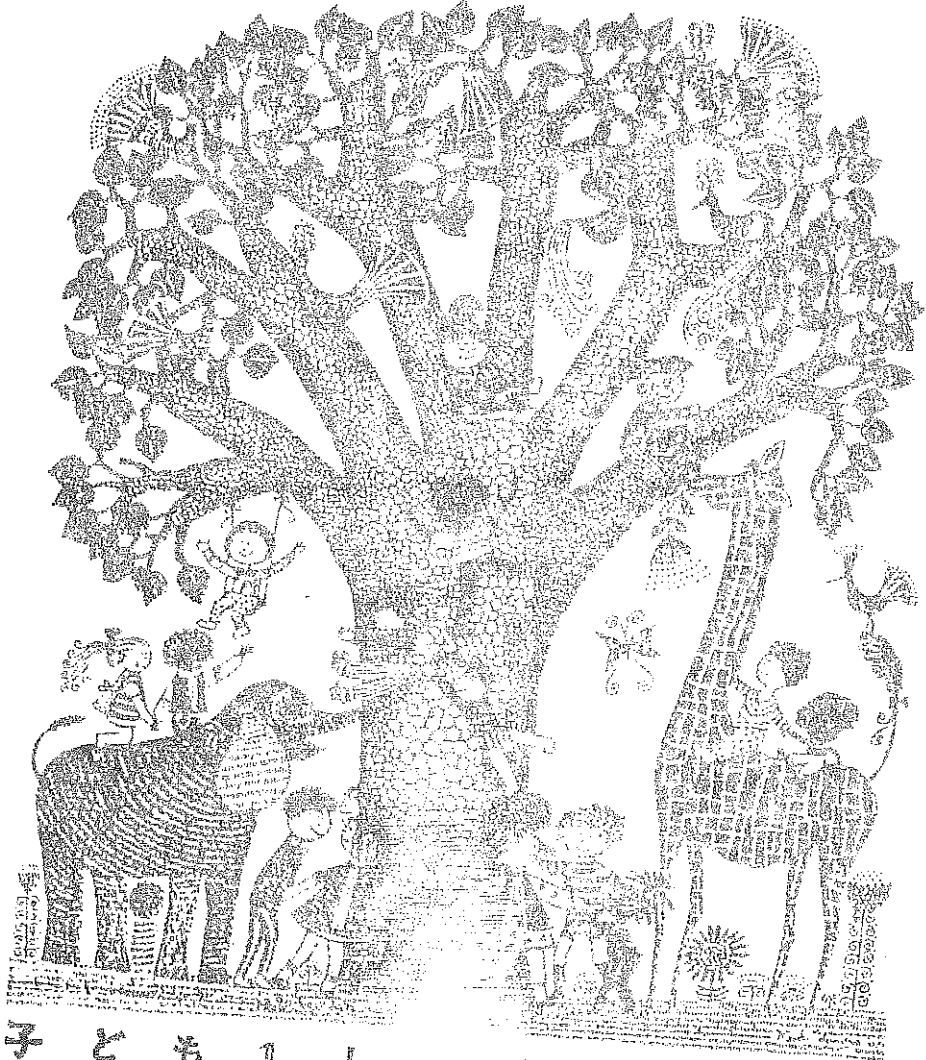
大阪市北区中崎西1-6-36 サクラビル新館308

「自然を返せ！ 関西市民連合」事務所気付 ☎06-372-1561

特集
(2)

ボルネオ島・サラワクの森から③
今なぜ、アジアなのか---?②

一部 100
年会費 1000



子ども一人一本の木を

★ブロッケード始まる。

九月十日、ボルネオのサラワク州で、先住民のプナン族がブロッケード

(林道封鎖)に立ち上がった。十以上の集落が一斉に決起したのは、去年これにて二回目ということだった。現場は、ある河沿いのプナン族集落から山を登って二時間。我々が着いた朝八時には、

すでに木のバリケードができており、その前に丸太を満載したトラックが、4台止まっていた。路上に三十名程のプナンの人々がいる。女や子供の姿も見える。この辺に外国人が来てはいけないことになっているから、私と友人の樫田君は、茂みの中に息を潜め、小さなのぞき窓からカメラのシャッターを切る。しばらくすると、伐採業者のジープが、偵察にやってきた。中国語でさかんに相談をしてまた帰っていく。昼近くになって二台のジープで、小銃

をもった制服警察数名と、業者おかか

えの「若い衆」がかけつけ、バリケードを壊し始める。プナン族の方は、今日は逮捕を極力避ける方針らしく、抵抗せずにされるがまだ。こうして、この地点でのブロッケードは、六時間

程であっけなく終ってしまった。この日は逮捕者は出なかったが、帰る途中の山道で、同じ集落の別の一隊とすれちがい、彼らはさらに遠くの林道でのブロッケードに向かうと言っていたから、ゲリラ的に次々と同じようなことをくり返したらしい。全体で百名以上が逮捕され、十月下旬から裁判になっている。

★吹き矢を放つが……

大きな犠牲を払いながらプナン族がブロッケードという実力行使に何度も立ち上がるのは、彼らが、狩猟採集にたよる文字どおりの「森の民」だから

だ。それは、彼らといっしよに森の中

に入ってみるとよくわかる。男は全て狩人だ。先端にヤリをつけた吹き矢筒を持って道もない、森の中を自在に歩き廻る。村では、グータラで風采の上がない彼らだが、吹き矢を手にする表情が一変する。鳥の鳴き声、茂みのわずかなかさつきに、全身耳にして身構える。筒を口にあて一吹きすると、梢に止まっていた、小鳥が深々と吹き矢に貫かれて落ちてきた。「伐採が始まる前は、イノシシもシカも幾らでも採れた。」ところが、今は伐採の音に驚き棲み家を失った動物が、森の奥へ奥へと姿を消してしまい、二日、三日と森を探しても一匹も獲物がない時もあるという。「仕方がないから近くの国立公園にお金をかせぎに行ったりするんだ。」外国人ツーリストのガイド兼、荷物持ちのアルバイトだそう。私には森の木のそれぞれの個性を区別できない。森は、緑色をした一つの

サラワク先住民が問いかけるもの

高世仁

抽集物である。一人の男が、大きな木に取り付いてサルのように登って行く。上からバラバラ落ちてきたのは鮮やかなオレンジ色の果実だ。町の市場になんか無論並んでないが、歯ざわりは、ジュシーで熟れた桃のよう、味は甘みの強いマンゴーといった感じで素晴らしい。私は、六年間東南アジアに暮らしたが、こんなにもまい果物に出会ったことがない。この後一時間足らずのうちにここにもそこにもと五種類の果物をごちそうになった。その他頭痛と腹痛に効く薬草、吹き矢筒の材料になる木、主食にするデンブンをとるサゴヤシと次々見つけて教えてくれる。まるで植物園で見学をしているようだ。傑作だったのは、吹き矢の先に塗る猛毒の草を見せてくれたときだ。声を潜め、まじめな顔で私に言った。「この草の使い方はおれたちブナンしか知らないんだ。だから他の部族には教えちゃダメだよ。」

★森林破壊と道路封鎖

森には必要なものがすべてある。たしか原後雄太さんが、ブナンにとっての森は今の日本人にとってのスーパーマーケットのようなもの、と表現していたが、言い得て妙である。「森が壊されるといことは、私たちの生活そのものを奪われることなんだ」と、あるブナンの男はしみじみと言っていた。こうして追いつめられたブナン族は今後どうやっていけばよいのか。これまでのようにプロツケードを続けることには見直しの気運がある。第1に、逮捕されたときの生活へのダメージが大きすぎる。大きな町に出ることなどほとんどない彼らだ。警察の留置場につながることは精神的にまいってしまう。(留置場での先住民に対する扱いは、とてもひどいそうだ。)働きざかりの労働力をとられる上、食料の差し入れ、裁判の度に山から出かけていく交通費

と経済的な負担もバカにならない。これを聞いて、少なくとも裁判にかかる費用くらい日本の市民団体などから国際的援助ができないものか、と考えたりした。

第2に、プロツケードの効果である。八七年十月の法改正でプロツケードを弾圧できるようにしたばかりでなく、政府と業者側が経験をつんで、主な伐採キャンプには警察官を配置しておき、先にのべたように平日足らずで現場にかけつけられる態勢が整っている。以前は、長ければ数カ月もオペレーションを麻痺させることができた。

集落のリーダーは、これからのプロツケードの目標を、「実際に伐採を止めるといふより、我々がここまで追い詰められていることを世界中の人々に知ってもらいたい。」と語っている。それで今回は、私達とアメリカNBCが、外国テレビとしては始めて取材の便宜を計ってもらった。

しかし、世界に訴えるといっても、訴えに呼応してくれる人たちがいて始めて実を結ぶものだ。ここ二・三年で、「ウータン」はじめ熱帯林問題に取り組む活動が活発になってはいるものの問題の大きさに比べてまだまだという感がある。たとえば、先にあげた裁判費用の援助とか、もう一步具体的に踏み込む運動ができないものだろうか？私の関わるマスコミに当たって、環境問題を取り上げる記事や番組が去年飛躍的に増えたとはいえ、「地球CO₂が：」とか「熱帯雨林は、有用な遺伝子の宝庫」といった大上段からいきなり入っていくパターンが主流である。森を酸素の供給源として見る場合、森が日々の生活の拠り所であるプナンの人々と一体どうやって「連帯」できるのか。私としてはCO₂や遺伝子のはひとまず脇において（これはこれで重要でしょうが）、私たちの消費のせいで、現実困っている人が出て

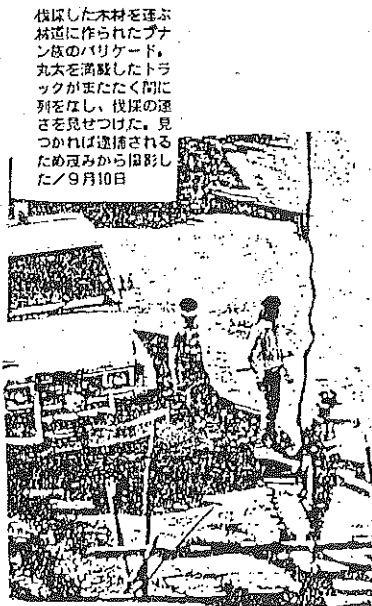
いる現場からまずは出発すべきではないかと思っている。プナン族について森に入った時、私にとっての森のイメージと彼らの森に対する見方の違いに驚かされたが、そんなところから対話をはじめていきたいと思う。

★ウマバワンの伐採と焼畑

ウマ・バワンというカヤン族の村がある。この村は、今後とも伐採反対運動の中心になっていくはずなので「ウータン」の人も注目しておいてほしい。そう、日弁連が調査に入ったあの村だ。家族数七十。バラム川河口から船を二回乗り換えて丸一日かかる。ここで、

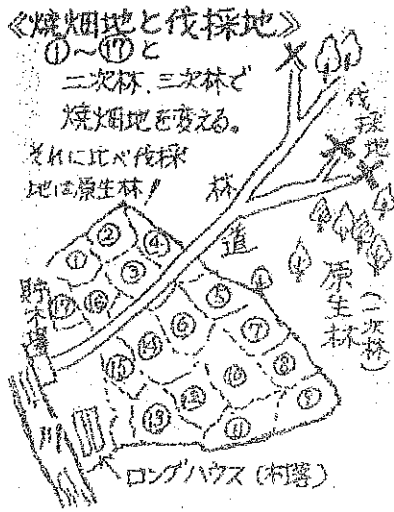
十月二九日、伐採反対の大集会が開かれた。八七年、この村の人々がブロッケードを行ない、弾圧されて四二人の逮捕者を出したが、その二周年を記念したものだ。この集会はサラワク州の伐採反対集会としては最大のもので、樫田君が名簿で数えたら、プナン族、

カヤン族、イバン族、ケニヤ族などの先住民を中心に村の外から参加した人が一五〇名であった。あるグループは、三日かけてやってきたという。私も含め、日本、カナダ、オーストラリア等の外国人もいた。船着場に着くと横断幕の歓迎隊が出迎え、竹筒の空砲が鳴る。一列に並んだ民族衣装の奇麗どころから一杯ずつ酒をふるまわれ、ゴング演奏の中を会場にたどり着くところには皆いい気持になっているという具合。こんな集会を開くのは始めて。みんな励まされた様子で、集会は、大成功に終わった。「来年もまたこの日に会おう」と手を振って別れた。



伐採した木材を運ぶ
林道に作られたプナ
ン族のバリケード。
丸太を満載したトラ
ックがまたたく間に
列をなし、伐採の速
さを見せつけた。見
つかれば逮捕される
ため河みから撮影し
た/9月10日

成功は成功として、部外者である私には考えさせられることが幾つかあった。まず、伐採問題のとらえ方に部族間でかなり開きがあるようだ。サラワクには先住民の部族が二十くらいあるらしいが、狩猟採集民はプナン族だけで、他は、ほとんど焼畑の定着民である。焼畑では陸稲を中心に、トウモロコシやイモを作っている。川沿いロングハウスという長屋式住居があり、焼畑地、さらに奥にいわゆる原生林が広がっている。ごく大ざっぱに図を書くところなる。



焼畑地では毎年火入れする場所を移動させていき、十数年して始めの所に戻る頃には、再び林が盛っている。その林を切り倒して焼くというのを繰り返すわけだ。

ところが、商業用の樹齢百年以上といった大木は、原生林のほうにあつて、そこには焼畑は侵食していかない。だいたいそんなジャングルを切って乾燥させ、火入れするなんてことは労力がいってできない相談だ。つまり、商用伐採と焼畑が同じ森林で競合することはないわけである。

では、商業伐採の悪影響はどんな点に出るのか。ウマ・パワンで聞いたところ次のような答えだった。

- (1) 動物がいなくなり、果物、ナッツなどの副食物、薬草、ラタンなどの有用物が少なくなった。
- (2) 伐採のため、上流から泥が流れ込んで、川から飲み水を得られ

なくなつた。また、魚がとれなくなつた。

(3) 林道が焼畑用を破壊している。

(1)と(2)はプナン族にも共通の問題である。焼畑民といっても、森(いわゆる原生林)に生活の相当部分を依拠しているから森の産物の減少は生活に直結する。また水源の汚染は私自身上流まで行つてこの目で確認したが、倒された木や土砂が流れ込んで深刻である。ただ、プナン族と比べれば主食が確保できる分、生きていけないうつた追い詰められ方ではないようだ。

他方、商業伐採の矛盾は、焼畑民の場合、複雑な形で出ることもある。たとえば、ウマ・パワンでさえ、村長を中心と二割近くの家族が伐採賛成派として抱き込まれており、村は真っ二つに割れている。伐採会社に勤める若者も一人や二人ではない。曲がりなりにも利益誘導のシステムが働いているの

だ。これを踏まえて反対派のリーダー達は、村に現金収入を確保する自立の道、つまり「村おこし」の方針を打ち出した。養魚場の建設も始めている。

★どうすれば連帯が出来るか？

大集会では、各部落から発言があったが、プロツケードを今後ともやると言い切ったのはプナン族代表だけで、結局共通の方針にはならなかった。ウマ・バワンでは、八七年の大弾圧以降プロツケードは、行なわれていない。印象的だったのは、殆どの代表が、「先祖伝来の土地をかってに踏みに行い……」と怒りに燃えて述べていたことである。焼畑民の間では所有観念が（私たちのそれとは異なるが）しっかりしている。たとえば、「あの土地は十年前、〇〇家のおじいさんが焼いた畑だ」と村の人みんなが覚えており、そこは他の家族は決して使わない。集会では、クアラルンプールからも

支援の弁護士が法律相談に来ていたが、焼畑民たちが昔の土地証書がどうのこうのという話をしていると、プナン代表はボカンとした顔だった。つまり、焼畑民にとって商業伐採問題は、土地問題としての性格を持つということが明らかである。「先祖伝来の土地」という精神的価値が侵害される点が彼らの自尊心をいたく傷つけているようだ。

焼畑民の方が問題は小さいと私が思っているわけではない。もしそうなら片道三日もかけて集会に来たりはしないだろう。しかし、彼らの怒りをちゃんと共有できたかと言えば、理解できなかったことが幾つもあったと告白せざるを得ない。私は短すぎる滞在者でしかなかった。

こんな話がある。ウマ・バワンでは以前、毎年決まったところにイノシシの川渡りがあったという。果物の実りの時期が川をはさんで少しずつずれるのを追ってイノシシが集団で決まった地

点を渡河するのだそう。その場所に村の男たちが総出で待ち構えると、一挙に十頭以上も捕れたのだという。彼らは、伐採が始まって何年目にその川渡りがなくなると即座に答えることが出来る。自分たちの土地における動物の動き、果物の木の状態などを、私達とは比べ物にならない敏感さでとらえている。

あたりまえの事だが、彼らのそうした生活感覚を少しでも理解しようとするのが「連帯」の出発ではないかと改めて考えている。

私と榎田君は、今年日本からスタディツアーをウマ・バワンに送り、逆に村のリーダーを日本に呼んで、いろんな人に直接彼らの口から訴えてもらおうと考えている。

人と人が直接に交流する事はいいことだ。それこそ今もっと盛んにしたい。ウータンのみなさんが協力して下されば、と思います。



BLOCKADES NEWS

サラワク・プロケード

プナニ族

無罪判決下る!!

PENAN ACQUITTED

ウータンN0.10のサラワク統報に
ひき続き、道路封鎖をして戦っている
プナニ族の状況を報告する。

11/10付のSAM(マレーシア地球
の友)からの手紙によると、11/5、
マルデイで行なわれた裁判で22名、10
月にも、計25名のプナニ族無罪の判
決がなされた。焦点となっていたのが
森林法第9条。これは、道路封鎖が始
めて為された年に、改悪された森林法
で、第9条が追加されたために、逮捕
されたプナニ族他諸先住民が続出して
いた。(注)参照。詳細は前号大西裕子
弁護士の記事を、要下す。ウータンN0.11

注 一九八七年森林法第9条の追加。

先住民が慣習法上の権利を有する
土地であるか否か、問わず、ともか
くライセンスあるいは正当に許可を
得た業者が作った伐採用道路上に、
石・丸太他建造物を作った者は二年
の懲役及び六〇〇マレーシアの罰金に
処する。

しかし、プナニ族の弁護士は、それを遂手
にとらえて、次のように提果を申し立てた。
「彼らがバリケードを築いている現場をど
うえたものは誰もいない。現行犯を逮
捕されていれば当然に値するが、全く今
の場合証拠がない。よって、この苦終は
却下すべきである。」

裁判官は、この提果を受け入れて、彼ら
を無罪釈免としたのであった。なお、12/11
に同じくバラム河地区の7名のプナニ人が
無罪を言い渡された。一九八八年十一月か
ら一九八九年一月まで一ニハ名の先住民が
逮捕された。同九月には一七名も逮捕。
内三二名のみが無罪となつたが、まだ二三
名が裁判を待っている。

12/11付の通信(同じくSAMから)によ
れば、九月から拘留され続けた八三名のプ
ナニ人は、12/11に保釈された。従来の保釈
の条件として、五百マレーシア(約千七百
円)と二名の保証人を要したが、その条件
も改正されて、すべてのプナニ人に対して
一名の保証人だけでいいという事になった。
なお、聴取は、一九九〇年に持ちこたれた。

今、なぜアジアなのか。(2)

*** 茅野自然と文化を守る会 ***

地球に未来はあるのか

原 伊市

(1) 誰だ、熱帯林を濫伐する者は!?

「月の砂漠」と童謡が歌われて、今も耳に残るが、しかし今から文世紀後、地球の砂漠、という童謡が、火星人の子供に歌われるかも?。何しろ世界中の熱帯雨林が濫伐によって、日本の国土の%位を、日本の資本が濫輸入しているとのことである。――

朝日と日経だけ(ようやく)講読している。毎朝の新聞受けには、新聞自体の広告ページの数もさるごとながら、その増頁した新聞を更に上回る折込広告。色彩感覚もモヒシそうな色とりどりのハデな折込がブレイクと手こたえする。そのまま扱って積んどく、まず見たことは無い。私は、貧乏の老農を自分からして、D・ソーローの「森の生活」を実践する外ない。広告を見て買物をするなどという身では無い。さりながら、この広告の為に、やたら熱帯雨林が濫伐されて、先住民の

生活を奮い、光合成の貴重な植物を濫殺させることに犯罪感をもつ、劇者さえ使わない友人がいる。輸入木材の5%とか、それさえあるに、広告など見もしない家庭(割合多いうれし)にまで、毎日「サリと、熱帯雨林が、新聞少年の肩に倉いニむ重荷とな、こー。しかも、その広告の紙代、印刷代、また折込機械の消耗の代金は、コストとなって商品に転嫁されることは目に見えておる。私が時には、五ヶ七百円の缶詰や安物のスリッパなどを近所の農協スーパーで買っても、消費税の他に、見えない広告代が加算されているだろう。新聞店に広告を入れないように申し入れようかと考えて見る。

生活奮い、光合成の貴重な植物を濫殺させることに犯罪感をもつ、劇者さえ使わない友人がいる。輸入木材の5%とか、それさえあるに、広告など見もしない家庭(割合多いうれし)にまで、毎日「サリと、熱帯雨林が、新聞少年の肩に倉いニむ重荷とな、こー。しかも、その広告の紙代、印刷代、また折込機械の消耗の代金は、コストとなって商品に転嫁されることは目に見えておる。私が時には、五ヶ七百円の缶詰や安物のスリッパなどを近所の農協スーパーで買っても、消費税の他に、見えない広告代が加算されているだろう。新聞店に広告を入れないように申し入れようかと考えて見る。

(2) われらは、加害者国民

前述のことは、日本の大企業対われら国民の対立であるが、しかしこれを国際的

視野で見れば、われらは雨林伐採国の人民であつて加害者でもある。これを言っている原稿紙だつて、サバカサウワク州の出身かも。先日、搬出道路にバリケードを構築したというニュースを読んで、「こめんなさりと心が詫びた。

かつてわれらは、侵略戦争に勸奨されてアジア各地に武力進出、外国の熱地とは真赤なウソで、日本独占資本の植民地獲得の為であつて、われら国民は国内的には被害者であつた。が、国際的には加害者であつたのと、全く共通の、資本の論理に敗れたが故。

今世紀最大(今)の化学工場爆発事故とか言われる、インド・ボパールのユニオンカーバイトは、事故の後、被害者救済も逃げていないか。資本の論理は利潤追求であつて、世のため人のためなど、二枚く風であることは日本も全く共通である。

先頃、新潟水俣病の現地、阿賀野川中流の昭電加瀬工場を見学し、前日には熊本大学、原田正徳先生のスライドや講演を聴き、最後に被害者の人たちとの交流会を持つ機会に恵まれた。被害者の一人は、「大雨が降った時は工場内の化学汚染物を阿賀野川へ排水した」と語り、下流住民、漁師に与える一片の配慮もなし。それは、熊本水俣病の場合のチツソ工場と同じよきある。労働者の人権は完全に無視して、使い捨て、あの美しい紺碧の海へ、会釈もなく有機水銀の垂れ流し、漁夫狂い死んで、会社は、知っていただけに知らん顔。労組もはじめは会社をみるみ。という一連のことは私も一応知っていた。

しかし、原田正徳助教授の数々の著書と、購入したり贈られたりして知ったことは、チツソという会社が、全く非人間的、非人情的な仕打ちで労働者を使い捨て、平等、患者認定を、サボリ、右血、利権追求一途で済んだという事実であった。与胎児がらのメッセーヂ品などを一読すれば、著者の溢りヒューマニズムが伝って、救われたい患者に対するわれらの心に、暗の中の光明と示される思いで

ある。そして、優越国の人民もまた自由では無いことを改めて思い知るのがある。

(3) 結び

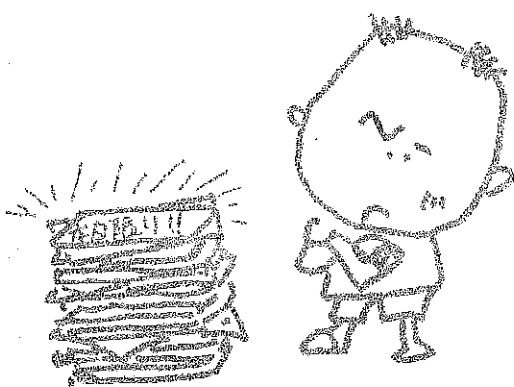
極地の成層圏のオゾン層の破壊や、酸性雨、炭酸ガスの増加等、地球規模の危機となり、世界の政治もようやく見て見ぬふりを続けられなくなつた。しかし、肝心なその発生源を断つことはしようとしぬ。それは、重化学工業、多国籍マシネスの自己否定に、なかりかねないからだ。言わば、責任逃れにすぎない。

しかし、高村光太郎の詩のように「自然の数字は厳として進み止まらぬ」こうして朝毎にひそりと新聞及び広告が配られ、多国籍企業以下、公害輸出を続ける限り、地球の終えんは紛論が段階に入つていなりという保証はない。たゞし、東欧の社会主義國の一党独裁の支配上を腐敗欲あつたために、資本制の生産力の高まがわれようとも、その陰で、世界が犠牲になり、自國が公害列島になり、地球が死への道と

めとらされていくことを、必要かつ十分に認識しなくては、人類の未来は保証されないと知るべきではなからうか。

(行記)

これを書いたりしたら、新聞代金を取りに来たので、うらには広告を入れないうように申し入れたら、OKした。配達の前は少しも軽くはるよ、と言ったら、微笑。これは原産分料金を4を払わないのに失禮である。



自然はかけがえのないもの

津田順子



一九七〇年、私が初めて外国に行つた先がアジアでした。シンガポールからマレーシア、タイ、ホンコン、台湾

と旅したことは、私の人生の重大な転機でした。戦後の民主教育の中で育ち、教科書の中の平和と平等と民主主義を信じていた二〇才の私は、アジアとの出会いの中で、現実を見ることを学んだといえます。

マレーの女の子は、サバ州の出身。毎朝、川へ水取りに行くのが日課という彼女が、何故、アメリカへいかなければならなかったのか。バンコクの安ホテルの受付は、日本人である私にだけ、どうしてイケズをし、反日感情をむきだしにしたのか。いろんな人との出会いの中の疑問は、答えはすぐで

なくて、その分、何處も何處も浮かんでは消え、私のアジアへのこだわりになりました。

もうすぐ二七才の頃、私は初めて、闘いました。私自身がクビになるという事態に、怒り、社長と直談判したのです。経営者との交渉だけでなく、自分自身の弱さへの闘いでもありました。そしてその時、マレーの女の子、タイの女性達の怒りが、私の心の中に、ピピンと響いたのです。不平等、不公平、人権侵害へのどうしようもない怒りの叫びが。

昨年、機会があつてフィリピンに九ヶ月滞在しました。フィリピンのバナナ農園や、さとうきび労働者、米軍基地のスライドを小さな集まりで写す度

に、フィリピンとどう関わるのか？と自問自答しています。答えはすぐにはありません。日本がますますアジアと、世界とリンクしている現在、アジアという鏡を見ると自分達の顔が写ってみえてきます。「消費者は神様だ」という掛け声で、使い捨て文化とモノを享受し農村をつぶしてきたように、「近代化」という掛け声で、アジアの人々の暮らしをつぶし、隣近所のなかに「おちこぼれ」や「窓際族」や「登校拒否」をうみだしてきました。

国際化はいりません。評論家もいりません。いるのは、人が人を大事にするという、自然はかけがえのないものだという、感覚と行動だと思えます。

フィリピンへのODAと

インチキ森林再生事業

西岡 良夫

★ODA増大は経済侵略のもと

一月二三日、中山外相は九〇年度の予算案でODA（政府開発援助）が一兆四四九四億円、前年度比五・八%増になると報告した。（次頁左下）

その内訳を見ると食糧援助、技術協力は一八%しかなく、食糧援助は三・七%も前年より減っている。殆どが他国への経済開発、つまり経済侵略や公害輸出費なのだ。

フィリピンを例にあげれば、

日本の援助は一九六八年から二〇年間で約一兆円で、八割が円借款。一方、フィリピンの八九年度国家予算は一兆六千億円で、その内の約七千億円（約四四%）が借款等の返済費である。フ

ィリピンの経済学者の多くは「利払い、元金返済が国家予算費の五〇%を越えるのは時間の問題」といつている。（週刊ポスト）

ODA資金で道路、発電所、橋梁、灌漑用水、病院等建設費の大半を日本企業が独占する。そのうえ、円借款の七割以上も日本企業に還流している。他国への無償援助の資金も企業に還流。誰のための援助なのか？

★環境保全費の大半が原発用

環境庁が各省庁とでまとめた「地球環境保全費」四五二三億円の九〇年度予算は、三分の二が地球を破壊する原発予算だ。他の予算費で環境「ODA」や

89・7・24

全国自然保護施設連合会の

決議と環境庁への質問

これまで大企業は、住民の声を無視して国内の海を埋め立て、山を壊してきた。「略」石油ショック等で大企業はアジアなどに進出した。ところがどうだろう。

マレーシアでは三菱化成が放射性廃棄物を野積みし、ジャカルタ湾では水銀汚染が拡がり、マニラでも赤潮がいつぱいに。現地住民が訴えても日系企業は居直って改善しない。

〔略〕アジアの熱帯林破壊は日本企業の伐採によるもので、アマゾン等は牧場にするための森林破壊が主原因である。先住民の生活と環境破壊する伐採を直ちに止めるべきだ。

質問

1. 環境庁は環境予算を増やしただけで良くなると考えるか。予算の内訳と内容も明らかにせよ。
2. 今までアジアなどに拡がった汚染を貴庁は調査し、日系企業へ改善を求める予定があるのか。
3. なぜ「環境対策に原発推進」なのか。
4. 伐採され、破壊された熱帯林。保護のためにどんな対策をとるのが有効と考えるのか。
5. アジアでは低賃金であるため、ハイテク産業が押し寄せられており、今後予想されるハイテク公害の対策は。
6. 温暖化防止に原発、LNG以外どのようなものがマシか。

3/10 11 日弁連・国際環境フォーラム

★「東南アジアにみる日本の公害輸出と環境破壊」

―海外進出とODAを考える―

八八年十一月、神戸において日本弁護士会は、国際人権シンポジウムを開いて「自国の公害・環境問題を解決する責務と共に他国での事業活動を規制する協力の充実が必要」との宣言を採択しました。そこに参加されたマレーシアのモヒディーン氏を招いて、ウータンなどで講演をしてもらいました。今年三月には東京で、日本弁護士会が「公害輸出と環境破壊」の催しを開きます。現地からの報告は、

1. サラワクの伐採と人権
 2. T・ジャロン氏又はH・ガウ氏
 3. インドネシアの公害と環境破壊
3. フィリピンのレイテ島開発と公害などと日弁連の報告、分科会等です。三月十日午後一時より日仏会館、十一日は主婦の友文化センターや日仏会館。TEL03-291-1143日仏会館(お茶水下車)

来年度・環境保全予算4500億円 半分以上が原子力開発費

一九九〇年度(平成二年)政府予算のうち地球環境保全に関係する各省庁の予算をまとめた資料を環境庁が作成したが、この中に科学技術庁の原子力開発費が含まれていることが分かった。環境保全関係予算は約四千五百億円、うち原子力開発費は半分以上の約二千五百億円、日本の環境対策の柱が原子力開発と受け取られかねないことから、反原発グループなどの批判を呼んでいる。

環境庁が「温暖化防止に効果」 資料作成

環境庁が各省庁と共同で作成したこの資料は「平成二年度地球環境保全関係予算について」と題し、新年度政府予算のうち地球環境保全に関する各省庁の予算の項目と予算額をまとめている。こうした資料の作成は今回が初めて。政府の環境対策を国内外に説明する際、この資料の数字が使われることになる。資料によると、予算は総額四千五百二十三億円で、今年度比べて六、三%増。内訳は、国際機関への拠出や観測・調査研究、環境ODA(政府開発援助)などの一般経費(が六百億円)、地球資源衛星一島の開発など「衛星等研究開発関係費」が二百九十九億円、「エネルギー対策関係費」が三千六百九十三億円などとなっている。問題はエネルギー対策関係

反原発グループは

批判

「温暖化対策」の項目に科学技術庁の「原子力の開発利用の推進」二千五百四十八億円が含まれている。通産省の「原子力・天然ガスの開発・導入促進」四百五十六億円を含むと、政府の環境予算の三分の二近くが原子力関連予算で占められていることなる。また、服部学・立教大教授(原子核物理)も「炭酸ガスをたくさん出しているのは自動車と工場で、原子力発電では置き換えられない。環境予算に入らないのは明らかです」。

90年度 ODA 予算

90年度 ODA 事業予算 (単位: 億円、%、△はマイナス)

	予算額	伸び率
▽贈与	7,735	8.8
○二国間贈与	4,467	4.8
①経済開発等援助	1,621	1.6
②食糧援助等	412	43.7
③技術協力	2,434	8.8
○国際機関への出資・拠出	3,269	14.8
①国連等諸機関	558	6.3
②国際開発金融機関	2,711	16.8
▽借款	8,260	2.7
①海外経済協力基金	7,781	3.3
②日本輸出入銀行	20	0.0
③その他	458	47.5
▽小計(事業別)	15,995	5.6
▽回収金	41,502	
合計	14,494	5.8

崩れてゆくアマゾン(4)

木霊が鳴る地へ②

西岡 良夫

〔5〕ジャングルのテロリスト達

「ズドドゥーン。」警報が一斉に引かれた。不意を突かれたチコ・メンデスの身体には、弾丸があちこち刺さっていた。暗闇に紛れて忍び寄っていた者たちは、夜のざわめきから遠く遙かに去っていく。

「森林伐採反対」を唱える者に、死は突然訪れるのだろうか。この危険を誰も知ることが出来なかったのか。彼が死んではや一年が経ったのに、雇われた狙撃者や牧場主は未だに逮捕されていない。

「ブラジル政府」は、貧農、貧困者の不満を反らすために“土地無き人々に、人無き土地を”というスローガンで、アマゾン開発を奨めてきた。ところが、ほとんどのアマゾンの土地は農地に不適で、

熱帯林の伐採を拡げることとなってしまった。鉱山開発、道路建設から始まったアマゾン開発は、ダム建設や農地開発も行うが、それは元から住んでいた人々を死の淵に押しやるものだった。にもかかわらず今再び、アマゾンでゴールド・ラッシュが沸いている。

「俺は三〇人殺した。あいつが俺の分を取るからさ」と、テレビに後ろ姿で映った男。金や宝石の争いなどによって人をあやめた者たちは、何の罰も受けずに暮らしている。富に眼がくらみ、人の生命や自然を奪う者たち。富と権力を最高の宝と崇め、掠奪者は「開発と進歩」を至福としてきた。しかし、彼等の行為は、先住民の「インディオ」の土地や生命を奪うことから始まり、アマゾン開発によって、その周りで生きて



チコ・メンデスの家近くの基金館

きた生物全てを死に至らしめるという事だった。

一九六〇年頃より始まったこのジェノサイドは、アマゾン横断道路が出来た一九七四年頃から加速度を増していった。

一旦、世界銀行が融資を留めたので、アマゾン横断道路の建設が中断したものの、工業先進国の圧力によって、今また道路の建設が再びされようとしている。生態系のみな殺しこそ、その地域の生物、人間のジェノサイドであり、その死が地域だけでなく地球全体に及ぶのだ。その事を、権力や富や名誉を欲している者は知っているのだろうか。

富を欲している者は破産や貧困、平等を恐れ、権力を愛する者は悪評や抵抗等に怯え、開発や進歩史観を押しつける者

は未開、野蠻に恐れている。彼等はそれを「死」と感じてゐるからだ。それは「死」なのだろうか。

富豪や権力者にも物質的な死はやって来る。死は必ずやって来る。しかし彼等はその死を恐れて、抵抗、貧困、破産、悪評、未開、そして平等や自由を抹殺しなければならぬと、自らを守るために、ジェノサイドを地球中で繰り抜いている。それで彼等の身体は、物質的に死に至らず、社会を至福に出来るとも言えるのだろうか。いや、死を意識出来ない彼等こそ「死」に至る朽ちたものではないか。今、人間だけでなく、空も海も山も川も、生きとし生けるもの全てが、富や権力を欲しがらる彼等によって生存を脅かされているのだ。

(6) 助け合つて生きる森

浸水にあつてもアマゾンの森は生きてゐる。その根は大地に深く入つていなくても、広く浅く根をおろしている樹木たち。樹幹の間では違う種類の植物がその根に棲み付いて暮らしている。森林は大

昔から何百万年も共に生きてきた。お互いを頼つて生きてきた。ジャングルの微生物や動物、植物はお互いに依存しあつて生きてきた。そこで「種類の生物が増える」と、それらの種を一時間に淘汰させて、生態系のパラシスをとつて生きて来た。

しかし、人間は自然を自分の欲するままに利用し、自然界の織りなす多様性を認めずに、殺戮を続けてきた。特に掠奪者は言葉も習慣も感覚も生活様式も多様な「インディオ」たちに対して、収奪し、殺戮し、その多様性を破壊してきた。多様性があつてこそ、生態系が成り立ち、地球上の生物が生きられてきたのではないか。

掠奪者の人間は、ジャングルに入るとその多様性に驚いて、このままでは「死」に直面するかもしれないと怯えるのが常だ。それで、生態系も含めて同一化しなければと、ジェノサイドを繰り返してきた。欲望の塊、それが僕達の社会なのかい。

死は必ずやって来る。大木の死も五百年か、千年先にやって来るかもしれない。しかし、そこにその樹の種がとんで、新たな生命を持った若木が生えてくる。そのこと

を生きものたちは知つてゐるのだろうか。今まで殺されてきた多くの「インディオ」やチコ達は、大木と同じように、物質的な死が近くにあると判つて闘つてきたのかもしれない。自然と「共に生きていよう」という魂がそつせされたのだろうか。

共に自然の中で暮らすことを身につけた「インディオ」などの人間は、ジャングルの多様な自然を畏れ、そして愛してきた。だから、彼等は「文明が少なくて、森や川があるからアマゾン」は豊かなのです」と、ダム建設をしようとする電力会社に抗して言つたのではないだろうか。

自然への畏敬を忘れてしまつた僕達の社会、多様化して共に生きてきた自然界を、ジャングルという多様な環境で生きてきた狩猟人を、われわれはことごとく抹殺してきた。他のものを死の奈落に突き落した者、それを懸つて見ていた者も掠奪者の同一化に弱い馴らされたのだ。言語の統一、国家を作ること、法律の制定、領土の決定、権力奪取、平等破壊、自由と時間との搾取、それは多様化と領

性全て奪い捕るものではないか。

これは農耕化から始まった。獸を家畜化させて人間に馴らし、穀物や果物を富として蓄積させるために栽培した。そしてその地を開い込んで、人間は自然を我がものとしてきた。同一化すれば死の存在を恐ろしくないと考えた人間は、多くの自然を、そして自らも生きている環境の多様性をことごとく破壊してきた。チグリス、ユーフラテス両川にはさまれた森を薙ぎ倒して栄えた農耕文明は、その破壊が生態系を壊したことから始まっている。

これら全てのやり方は、多様性、種の個性を奪うものだった。にもかかわらず、進化する掠奪者は、それをより増幅されて来ている。今、僕達はどうしたらその多様性、種の個性、そして自由を取り戻せるのか。

〔7〕木霊が鳴る地へ

軽飛行機で飛ぶと、とてつもなくアマゾンのは広い。森を倒して作った町から十分も経たぬうちに、ジャングルに来てい

る。空から見ても樹木の種類が多く、彩あいはまばゆいばかりだ。ピンク色の花、黄色に縁どられた花が緑のジャングルに咲いている。一度見たらもう見られない。群生は決してしない豊かな森。

アマゾンには十萬種以上の木が生えて、昆虫も動物の種類も非常に多い。しかし、アマゾン開発が始まって種は次々と姿を消している。町からはずれた所でも、青く輝くモルフォ蝶すら見られない。全て奪い尽くす開発。木立も切られていくカラジャスの森。人間に飼育された牛だけがのんびり寝そべっている。この牛たちも人間に食われてしまうのだが――。

昔、森にカミが棲んでいると言った。地の彼方から豊穡がもたらされると言った。《生》も《死》ももたらされると言われた。樹木には違う植物の命も宿り、木が倒れても種が飛んで新たな生命を育むので、父祖は木に霊が有ると言った。そして、水に霊が有ると言った。その木や水は一分も経たぬうちに、掠奪者の破壊が起こっている。

森にも川にも土にも霊が有るような気が

する。魂が継がれるので、新しい《生》は産まれてくると思う。共に生き、共に暮らし、そして各々死んでゆく。生き方が多様だから、自然は共に生きてゆけるのではないか。同一化されずに原始林は生きて来た。種の個性が尊重され、そこに自由と多様性があるから、森や川や土は命を育んで来た。

しかし、アマゾン開発はとてつもなく巨大に拡がるうとしていく。木の霊、川の霊、土の霊はどうなっていくのか。命を産み出す大地を、欲の塊の掠奪者は知っているはずがない。

風に吹かれて音がする。緑豊かな大地の音がする。木がささやく音だろうか。遠くの川の音だろうか。それとも土がざわめく音だろうか。軽飛行機に揺られて森から音がする。

「今、掠奪者を撃て！ 開発の時を止める自由、個性、平等、多様性、そして野生を取り返せ！」と木霊が鳴っているような気がしてきた。



89年度上期会計報告 (89.6月～90.1月)

みなさまのご協力ご理解ありがとうございます。

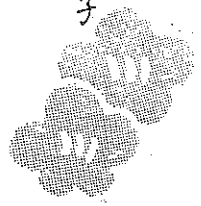
うございませう。お陰さまで、会の懐も程々でまわっております。89年に入りまして、さうに活動の充実化をほかに、まいてりますので、引き続き、よろしくお願ひいたします。

なお、下記のとおり、会計の報告とさせていただきます。これにより、

一 一・〇五四円は、下期へと繰り越させていただきます。

一年半、務めさせていただきましたが、次の人(川本克則)さんに会計を引きついでいただくことになりました。いろいろの方がウータンの活動にかかわっていただけますことを心算にしております。

会計 牛島美成子



☆ 収入の部

・88年度繰越し金	49,311円
・年会費 @1,000×77	77,000円
但、内3,000円は、次年度分として預り	
・カンパ	91,978円
・アジアの木へ	500円
・例会会場費	47,700円
・Hutan～森の通信販売	3,750円
・謝礼	15,000円
	<hr/>
	285,239円



☆ 支出の部

・通信費	66,743円
・講師謝礼	10,000円
・例会会場使用費	26,265円
・紙代	27,229円
・図書購入	22,248円
・雑費	800円
・消耗品費	20,400円
	<hr/>
	174,185円

★ 189年度 納入していただきました方々(89.9.22～90.1.10) どうもありがとうございました。(敬称略、順不同)

- 山口八千代・土居文彦・松野明久・松井義子・早川和佳子・安堂和夫
 横目幸子・遠山ひづ子・大木義朗・田村義彦・川下知明・蓮原耕児
 梅尾文子・菊谷登子・坂本礼子・山本特嗣/紀子・井上正・平井英司
 青木恵美子・津田順子・雑草舎・稲垣紀代・鈴木千里・池山
 鈴木 佐々木幸恵・坂口誠也・野上ひづ子・伊藤雅彦・古沢 広祐
 松井やまり・小田浩・手田武彦・金山亮・山内智・太田伊久雄・林根二

★ カンパありがとうございました。(敬称略、順不同)(89.9.22～90.1.10)

- 西岡良夫・山口八千代・福田敦・伊東万千子・松井義子・早川和佳子・安堂和夫・平井英司・雑草舎・稲垣紀代・ハルセル・山内智・佐々木幸恵
 佐野徳子・梅尾文子・市崎英二・伊藤万千子・小田浩・伊藤初美・斎藤豊夫
 山本紀子・手田武彦・梅尾葉子・(村井さとし)
 ※ 特に明記しない方は、会費以外にカンパとみなしております。

「炭焼」は3月末か4月1日予定（暮らしを考える会と共催で）

ウータン活動スケジュール

2/06(火) ウータン定例会議

11月 二月三月四月五月の

行事、活動打ち合せ

場所 / 大阪府北区中島面のコオ

然達台ニ事務所(地下鉄

中島町駅より徒歩三分)

時間 / 午後七時〜九時半

※ちよっこのをくだけるのト。

お気軽に どうぞ

2/18(日) ココみとくらしも考え

場所 / 大阪市中央青年センター

時間 / 午後二時〜五時

※森の宮より徒歩五分

※くらしを見直すには、どこから

メスを入れるか。まずは、紙に

焦点をあてて、現状報告と、リ

サイクルの流れをさぐる。又、

清掃業務の担当者に、自治体と

しての、とりくみについて話し

こいたで。

2月末 ウータン会議/連合事務所にて

協力を、参加を

★ ウータンはこの六月で二年目を

むかえます。それにあたり、森友校

様と私たちのくらしを考えるために

パンフレット作成に取り組み始めて

います。内容は、

①アミア等での借換状況、②経費使

態等(南光問題)と人権問題、③入

入、合衆の使われ方と収束の歴史、

④紙、割りばし等、環境破壊と私た

ちの暮らしのあり方、⑤調停委員生

活と力を使わせて下さい。

★ 三月末までは自主作製の「オス

も存ろう」と思っています。また、テ

レホンカードやCD-ROMの作成と校

討紙、わけこきなどはどうも大変があれ

ば、御一顧を。

★ 三月上旬には外国人ゲストを呼

んでの講演、三月末には「サラワフ

抗議行動デー」(道路抗議の三週年忌

をめぐって話が進んでいます。

★ 編集後記

ウータンの連綿たるは、果してとこ

か。①連合事務所(専任スタッフが

いるわけではない)の、事務局会議

の時以外に電話しても意味が(なし)

②他のメンバーの家……たとえば

前田さん(彼の家は、コピー機、輪

転機、ワープロとある)に事務局品が

すべて置かれていて、さあウータ

ンの事務所・作業所)か、鈴木さん

の家か、私(牛島)の家から、活動

詳細は③にのべておきます。

前田さん(のせこ二二五二の五〇五

鈴木千里(のせこ二二八一三六六〇

牛島美枝(のせこ二二六三三三〇三三三

マ「距離」のテーマは、自然との天

候、やて。自然を壊し、地価高騰さ

せて、何が良か、いらわぬが自

然。核専したら、ありあり、ワイリ

ピン、ミンクオオ島では毎年の如く

「自然を金」が起きている。核専し

た奴は誰や……? (西園)